

干潟を占拠する特定外来生物

ヒガタアシ

村岡哲郎（日本植物調節剤研究協会研究所）

Spartina alterniflora Loisel. イネ科 スパルティナ属

ヒガタアシ（写真-1）は2011年に愛知県の梅田川で初めてわが国での定着が確認され、梅田川流域に最初に侵入したのは2005年ごろと推察された。それからわずか5～6年で長さ1km以上にわたる河川敷がヒガタアシに埋め尽くされていることが判明し、急遽、外来生物法の特定外来生物に指定された。愛知県では積極的な防除対策が行われているが、熊本県内の複数の河口域にも広範囲に発生していることが確認されており、全国各地での警戒が必要である。

■分布

北米東部（米国、カナダ）沿岸が原産。現在では米国西海岸、イギリス、オーストラリア、ニュージーランド、中国、インド、フランス、オランダ、日本（愛知県、熊本県）など世界中に広がっている。海岸近くの河口域、塩生湿地、干潟、塩水の入る池などに生育する。

■形態と見分けるポイント

草丈は2mを超え、在来のヨシなどによく似ているが、定着地点を中心に密生し、正円状の群落を形成するのが特徴である（写真-2）。葉色はヨシよりも淡めの黄緑色で、プラスチックのような鈍い光沢がある。ヨシの葉は厚紙のような手触りで、茎からほぼ水平に出て、葉幅は葉の先端から付け根に向かって広がり、付け根付近で急激に狭まるのに対し、本種の葉はやや多肉質で、茎からやや上向きに出て、葉幅は付け根付近でも狭まらず帯状をしている。

■雑草としての情報

スパルティナ属が繁茂することで堆積作用が強まり、水路や湿地は水が流れなくなり、草地化してしまうこともある。現に、現地では、準絶滅危惧種のハマサジ、シバナ、ウラギクが生育する塩性湿地を本種が埋め尽くし、希少種の生育を著しく阻害している。米国では、植物以外にも、絶滅危惧種であるオニクイナを含む干潟湿地を利用する渡り鳥たちにも深刻な影響を及ぼす恐れがあるとされている。

オーストラリアや米国西部で大きな問題となり、先に特定外来生物に指定されていた *Spartina anglica*（日本国内では未確認）は、本種とイギリス原産の *S. maritima* が交雑し倍数進化して生まれたものとされている。

本種は、汽水から完全な海水までの幅広い塩分条件下に適応可能だが、完全な淡水の場所での定着は確認されていない。また、水の動きが緩い場所を好む傾向があり、強い波を受ける砂浜等での定着も確認されていない。

愛知県では、3月頃から冬越しを終えた新芽が動き出し、



写真-1 河川敷内に密に生えるヒガタアシ



写真-2 正円状の群落を形成する
（撮影：日本スパルティナ防除ネットワーク 花井隆晃氏）

5月になると急速に伸長し始め、7月末までに2mを超える。9月後半から開花が始まり、実った種子が順次落下する。11月後半になると開花した程は枯れるが、開花しなかった程はそのまま冬越しする。

■防除に関連する情報

愛知県では、種子による拡散を防ぐ目的で毎年秋に刈り取りが行われてきたが、年1回の刈り取りのみでは、発生面積の増加を抑えることができないことがわかっている。

掘り取りはヒガタアシの防除に有効だが、土が柔らかい干潟では、土中深くまで地下茎が伸びているため、これらの地下茎を全て掘り取るには多大な労力を要する。また、防除作業時に生じた地下茎や茎の切れ端からも再生が可能であるため、それらが潮に流されて拡散することにより、離れた場所へと生育範囲を広げてしまうおそれもある。ちなみに、掘り取って陸地に引き揚げたヒガタアシは、一時的に再生することもあるが、やがては枯れる。

海外では、*Spartina* 属に対し、グリホサートなどの除草剤を用いた防除が行われている。

■参考文献

- 環境省ホームページ. 日本の外来種対策 特定外来生物の解説 スパルティナ属 <https://www.env.go.jp/nature/intro/l/outline/list/L-syo-10-1.html>
- 日本スパルティナ防除ネットワークホームページ. <http://jpnet-prev-spartina.jimdo.com/>
- 九州地方環境事務所ホームページ. 外来生物対策 - スパルティナ・アルテルニフロラについて - 特徴や予想される被害等 - http://kyushu.env.go.jp/wildlife/mat/m_2_13.html